

講師：松尾 一郎氏 東京大学大学院情報学環 総合防災情報研究センター 客員教授

講演：新たな防災計画、タイムライン防災を学び、作ってみよう！

～コミュニティタイムライン、家族のタイムライン、命を守る地域の防災計画～

「Wake Up Call！！」目を覚まそう!!

最初に伝えたいことは、目を覚まそう「Wake Up Call」という言葉です。アメリカではよく耳にするのですが、地球温暖化を含め、あるいは地震も含め、自然は変わっている、だから目を覚まそうよ、そう訴えかけています。

災害から命を守るために重要なことがあります。まず1つ目は危機感を持てる社会だと思います。「台風が来ているよね」、「明日は大雨が降ります」といった危機感を共有し、それに対して構える。このような危機感を持てる社会を目指しましょう。2つ目、危機感が起こるときに、どんな被害が起こるか想像しましょう。具体的に何が起こるかまではわかりませんが、想像はできます。3つ目、災害の想像に対して、どう正しい行動をするか。この3つがとても重要だと私は思っています。

今、災害が多発しています。そしてこれから更に悪化していきます。急に線状降水帯が発生して、大雨をもたらせる雨というのは直ぐには逃げられません。そんな時、それぞれのエリアで、地域の呼びかけや声かけが行われているのです。広島県坂町で、倉敷市真備町で、逃げるのは今だと。コミュニティが重要だということも、是非覚えておいてください。これまでの災害では多くの守り手の方が亡くなっています。こうした人たちも守るということも考えていくべきだと思っています。

人には避難の壁がある

人には避難の壁があります。避難の壁というのは私が作った造語なのですが、例えば「無理に留まる」があります。最寄りの自治体からの避難指示や高齢者等避難など、いろいろな呼びかけはあったが、家財道具など大事なものがある、先祖代々受け継いだものがある、簡単に動かせないものがある、それがあから逃げられないという方、子どもや孫など、携帯電話を持たせられない家族の安否確認が出来ていない、だから自分が動けないという方もいます。次に「物理的に動けない」があります。要支援者を含め、寝たきりの方が同居されている方はなかなか自分1人じゃ動けないとか、同居されている要支援者の方を動かすため人数を手当てできないという方、避難所にペットを連れていけないから自宅に残るという方もいます。次に「危険や危機を認知できない」、これは皆さんの中にもいらっしゃると思いますが、経験がないからどれだけ危険かという物差しがない、だから分からない等があげられます。もう1つ、正常化の偏見（ノーマルシーバイアス normalcy bias）という言葉をご存じでしょうか。自分が今いる場所は安全だと思いたい、あるいは、なるべく平静を保ちたいという災害時の心理現象のことです。最後に、リスクを過小評価したい、楽観主義があります。

これらが避難の壁です。避難の壁を乗り越えないと命は守れないのです。例えば、鬼怒川が決壊したときに、茨城県常総市民 2,144 人にアンケートをしました。そうすると逃げなかった、避難しなかったうちの半数は安全だと思っていた、浸水しないと思っていたのです。次に、自宅に留まった理由です。これは3年前の熊本県人吉市の球磨川水害のときに人吉市民 1,889 人にアンケートをしました。そのうち避難す

る必要性を感じなかったからというのが約 32%、あるいは、過去の経験から自宅まで浸水すると思わなかったからというのが約 37%でした。実際に浸水したところの人たちに聞いて、多くの人たちが過去の経験から浸水するとは思わなかったと回答しています。

災害のことを常に意識しながら生活することはできません。しかし、私たちは、昔の人は自然に対して敏感に反応できていました。「何か風が違うな」、「雲行きが違うな」など、自然の変化に私たちは敏感だったはずです。動物がそうであるにも係わらず、私たちはそれができなくなり、忘れていただけなのです。

タイムラインって何なのか

2012年に米国ニュージャージー州を直撃したハリケーンの被害は、家屋の全・半壊が約4千世帯に上りましたが、作成していたハリケーン防災計画に基づいた事前避難により人的被害はゼロでした。この多くの命を救った防災計画の付属書（事前行動要領）がタイムラインの原型です。「誰が」「いつ」「何を」を明確化し、時間軸に落とし込んだものであり、台風を例にすると、縦軸に台風が最接近する5日前から、4日前、3日前、2日前、前日といった時間を、横軸に市町村、住民機関、国、交通機関などそれぞれが何をすべきかのルールを予め話し合っておく、合意しておく仕組み、これがタイムラインなのです。組織のタイムラインもあれば、市町村の様々な機関、町内会の人たち、家族、誰が要支援者で、避難を含めて誰が支援するかを決めておく、合意しておくというコミュニティ・タイムラインもあります。言いたいのは、地域、コミュニティ、そして家族の中で行動ルールを決めておけば、ルールに従って行動することとなり、避難の壁も乗り越えることができるということです。先を見越した行動ができるというのがタイムラインの良さではありますが、空振りに終わる時もあると思います。しかし空振りでも結果的に何もなくて良かった、そのような空振りを許容する社会にしないと、大きな災害には太刀打ちできないと思います。

こうしたことを全国に先駆けて実践している三重県紀宝町では、過去の豪雨災害を教訓に、町内会版タイムラインを作成し、台風接近の12時間前には高齢者の避難を終えるなど、早めの避難計画が定められています。また東京都足立区では2019年台風19号接近の際に、住民自らが作ったタイムラインに基づいて避難の呼びかけを始め、行政を動かし、足立区民3万3千人が避難しています。避難所の不足や避難所に区の職員が来ないなどいろいろな課題がありましたが、その課題をみんなで共有し、改善につなげています。また2020年7月豪雨においては、熊本県球磨村の渡地区では、作っていたタイムラインに基づき、避難の動き出しや決断も早く、また役場の避難情報や地域の呼びかけ等の情報で逃げた人が6割に上るなどタイムラインは活きましたが、球磨村や人吉市では死者、行方不明者が69人に上るなど、大きな被害が出ました。災害を経験して初めて気づく教訓があります。皆さんの行動と教訓と改善を入れていく、災害に強いまちづくり、人づくりをきちんと考えている、みんなで考えていくことが重要だと思います。

まとめ

2022年6月の中央防災会議で内閣府、消防庁が主体とする国の防災基本計画にタイムラインが位置づけられました。これまでに約12年かかりましたが、タイムラインを作って、使うことで生きることが分かった事が大きな成果だと思います。

一般に災害に対しては約3割が関心層であり、4割が中間層、残りの3割が無関心層に分けることができます。

大正13年3月に発行された『大震火災避難の心得』は、関東大震災クラスのマグニチュード8.0級の地震の体験者の声をまとめたもので、その心得の目次には、「用意周到」、「沈着機敏」、「臨機応変」という言葉が記されています。これはまさに防災につながる言葉だと思いますし、タイムラインの理念にも関わる言葉だと思うので皆さんにお送りして私の講演を締めたいと思います。

家族と私のタイムライン（タイムライン作成ワーク）

ワークでは、台風が発生し3日前からやること、1日前、12時間前、6時間前、台風最接近時のそれぞれの家族の行動を考えていただきます。台風というのは気象庁が進路を予測するため想像がつきやすく、タイムラインが作りやすいので今後地域で展開される際も、まずは台風でやってみてください。

さて、それぞれのご自宅で浸水被害が起こったとして、どのような被害が起き、どのように避難するか、予め考えていただきます。誰が何をするのも含めて家族で話し合うのです。これが重要です。

まず3日前、これは平常時です。事前に何をしておくべきか。避難所の確認もあります。新型コロナもある中で密を避けたいとなると知人宅避難となりますが、それも確認が必要ですよね。そのときの移動手段の車について言えば、水や携帯トイレの車載は必須です。

やってみると平時に関わるのが意外に多いことに気づくと思います。その場の再確認も必要ですが予め話し合っておくことが大切なのです。交通機関も計画運休を行う可能性があればそれをしっかり伝えるべきで、その上で皆さんそれぞれがどう行動するか予め考えておくのです。だからタイムラインは皆さんのタイムラインだけでなく、行政、交通機関のタイムラインが必要であり、様々な方々が災害接近に際しきちんと動く仕組みを作っていれば命を守れるぞ、と言いたいのです。

作っていただいたタイムラインの一例を投影しました。携帯電話の充電という項目を新たに作っていただいているのですが、停電への一連の備えも必要です。

タイムラインに正解はありません。大事なのはそれぞれが議論しておくことだと私は思います。